

2023. 4. 30. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書20章20～26節
『誰に依存していますか』

本日の聖書の箇所は「皇帝への税金」という小標題が最初に掲げられている通り、ユダヤでは紀元6年からローマ総督の管轄下に置かれ、皇帝への税金が徴収されておりました。これはどういうことだったのでしょうか。

ここで当時のローマの支配体制の構造をおさらいしてみます。ローマの支配には大きく分けると2種類の方法がありました。1つは都市国家群に対してです。そこでは個人への税の軽減とローマ市民権獲得への道が開かれておりました。いわば目に見える「平和」を与えて支配者ローマを侵略者ではなく、盟友として迎え入れさせるという方法論です。2つ目はユダヤのような地方社会の支配です。そこでは個人に対する増税(現代ほどではありません)とローマ市民権獲得への道は閉ざされておりました。いわば目に見える「抑圧」を与えて支配者ローマを侵略者として抵抗できない恐怖政治を植え付けるという方法論です。

前者は未来への貯蓄。後者は現在の搾取といったところでしょうか。この圧政に対して70年にユダヤ戦争と呼ばれる反抗が行われますが、それも鎮圧された状況下では、ユダヤはすでに抗う術を持たなかったというのがルカの背景にあります。20節に述べられますように、その後のユダヤ、つまりユダヤ教はローマの支配と権力におもねるように変質してゆくのです。

次に貨幣に関してですが、ローマの支配地に対する経済政策は先鋭的でした。支配地域にローマ貨幣を隅々に至るまで流通させ、実効支配を強化いたしました。デナリオン銀貨(24)には月桂樹を冠にいただいた裸像が刻まれ、皇帝ティベリウス・神の子アウグストゥスと銘打たれ、裏面にはその母リヴィアの肖像と大司祭と彫られてました。

軍事と経済という支配です。21節の「えこひいきなしに」という言葉も本来はユダヤ教の倫理であったのですが、この頃では「賄賂を受け取らずに」という意味に変わっています。権力に尻尾を振りつつなびくことが運命とでもいうようにこの男は登場します。

この「正しい人を装う回し者」(20)の問いに対して、イエスは「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」(25)と印象的な答を返されます。これは「国家と教会」の関係に対する答でもあるのです。けれども、ここではそのような後世に作られた解釈ではなく、まさに、今、この男にイエスは答えられるのです。

わたしたちは人生を歩むにつれて、何か自分に負わされているようなものがあることを感じる場合があります。周りを見回しても、良いものを負わされている人もいれば反対に悪いものばかり負わされている人を見つけることもできます。けれども、その負わされてどうにもならないものが、その人の自分というもののなのでしょう。

実はわたしたちは自分が思っている以上にお互い自惚れが強いのです。その思いが否定されたり、修正を求められたりすると、とたんに運命などといって嘆いたり呟いたりします。

しかしながら、その思い通りにゆかない姿こそが本当の自分自身の姿なのです。運命などはありません。あるのはただ「力」をかさに着て、酔いしれる自惚れだけなのです。イエスはただの一言をもってこの男に自分自身が誰に帰するのか、誰に所属しているのか、そして何よりも「キリスト者として誰に依存しているのか」を問うのです。